教育目標　【自分づくり】社会に目を開き　「なりたい自分」の姿を描き　実現しようとする人

○自ら考え、表現できる人（創造）
○仲間とともに高め合える人（共生）
○心身ともにたくましい人（健康）

学校だより　第９号

ひ　ら　く

平成２８年　６月２９日発行
須賀川市立第三中学校
ＴＥＬ　７３－２３７７
発行責任者：校長　高崎則行

「１年生から３年生まで、生徒が一つの輪になった！」
みんなが連帯感でつながった校内体育祭

６月２４日（金）、心配された雨もかろうじて上がり、最終日を迎えた校内体育祭を予定どおり終了することができました。

各学年の全員リレー、男女ベストリレーを終えて、体育主任の田代教諭は講評で大会をこう振り返りました。

「トラックを囲んで、１年生から３年生まで、生徒が一つの輪になった。応援する様子にも学級の一体感を感じました。このよい雰囲気をこれからのいろんな場面で生かしていきましょう。」

まさしく、この言葉のとおりで、レース前もクラスごとに元気のいい号令をかけ、はつらつと準備運動をする姿には学級の一体感がよく表れていましたし、レース展開に応じて声援を送っている様子、そして、ゴール後に喜びや悔しさをともにしている様子は、生徒同士が分け隔てなくつながっていると実感させてくれました。さらには、レース中の声援をよく聞くと、他の学年や学級の生徒に対する声援もたくさん混じっており、田代教諭の「生徒が一つの輪になった」という表現もうなずけます。

それだけではありません。２２日（水）は２年生、２３日（木）は１年生、そしてこの日は３年生の球技種目が行われています。私は、限られた時間ではありましたが、各学年の球技種目も参観しました。そこでは、ただコートに入っているだけではなく、一人一人が積極的にプレーに参加している姿。出番を待つ控えの生徒が一列に並んで声をそろえて応援する姿。得意な生徒も自分本位にプレーするのではなく、いいタイミングでいいポジションにいる仲間にパスを出している姿がとても印象に残っています。

「一人の生徒も独（ひと）りにしない」　そんな理想に近づきつつあるなあと感じることができました。

さて、詳（くわ）しい成績は、各学年の学年だよりに譲（ゆず）るとして、以下に各種目の第１位の成績を紹介します。

	１年	２年	３年
総合優勝	**４組**	**１組**	**１組**
男女混合　キックベース（１年）	１、４組	＊	＊
男子サッカー（２、３年）	＊	４組	３組
女子バスケットボール（２、３年）	＊	２組	１組
男女混合　全員リレー	４組	１組	２組
男子ベストリレー	１組	１組	１組
女子ベストリレー	３組	２組	１組

牡丹絵画展で教育長賞

６月２０日（月）に須賀川牡丹園保勝会（ほしょうかい）主催の牡丹絵画展の表彰式が行われました。その席上で、２年　永嶋綾花（あやか）さんに特別賞の教育長賞が贈られました。

また、次の６名が佳作に入りました。

１年　相 馬　　涼（すず）
２年　伊丹　美杜（いたみ　みもり）
２年　寺島　綾咲（あやさ）
３年　名古谷愛美（まなみ）
３年　石川　幹太（かんた）
３年　加藤　莉希（りの）

さわやかな朝を演出してくれる人

遠くて声が届かない場合には、手をあげたり、手を振ったりして挨拶（あいさつ）をするようにしているうちに、それが習慣になってしまいました。

ある朝、交差点でそんなに遠くでもない女子生徒に手をあげて「おはよう」と声を掛けました。その女子も手をあげて「おはようございます」と返してくれました。それから、急に手を引っ込めて「いけない、校長先生にこんなことしちゃった。」と頬（ほお）を染めました。思わず、手をあげてしまったようです。とてもうれしかったです。

須賀川三小の児童も自分の学校の生徒だと考えていますから、同じように挨拶をします。最近の朝、男子児童が手を握（にぎ）りしめながら私のところに駆け寄ってきました。そして、手を開いて見せてくれました。手のひらには、プルタブがたくさんありました。

「来る途中にたくさん落ちていたから、拾ってきました。」

朝の空気と一緒に彼の笑顔が胸に入ってきました。

その１　感情教育（家庭教育文献紹介「親でなければできない教育」より）

感情は、知能や社会性、その他の面に比べて最も早く発達するものです。

感情の発達の遅れは、ことばの遅れとなり、学習の遅れとなります。また、感情の整理が苦手だと、対人関係で様々なトラブルを抱えがちになるばかりか、ストレスを克服（こくふく）するのも苦手になるようです。成長の初期から始まる感情教育は、その後の子どもの人生を左右するカギなのです。

では、感情の教育はどのように行われるのでしょうか？

まず、感情は教えられるものではなく、幼い時分の母親の語りかけ、働きかけをとおして子どもに移されていくものだという認識が必要です。子どもはお母さんの感情に共感し、子どもの感情にお母さんが共感することで、感情が移されていくのです。好ましい感情も、好ましくない感情もこのようにして移入されます。ですから、周囲の大人が豊かな感情の持ち主であることが大事なのです。そして、何を美しいと思い、何を醜いと思うか。何に矛盾を感じ、何に怒りを感じるかという感情体験が、その人の価値観の根っことなり、その人の人間らしさとなっていくのです。

感情教育に母性は必要ですが、母親だけの仕事ではありません。広い視野や遠い先の見通しを持つためには、母親とは異なる立場の父親特有の感情を伝えることも大切ですし、お年寄りの感情も伝達してほしいと思います。成長するにつれて、よりたくさんの大人の感情に触れることが大切になってきます。

感情は教えるものではなく、移されていくものだと言いました。だから、学校教育では苦手な部分なのです。しかし、感情の成熟によって形成された価値観が、学校で行う様々な教育の効果にもつながってくるのです。

（興味を持たれた方には、ディズニー映画「インサイド　ヘッド」(2015)をお薦（すす）めします。）

本校ホームページでもご覧いただけます。アドレスhttp://www.sukagawa.gr.fks.ed.jp/?page_id=196